

(令和7年8月18日)

# 大豆情報

秋田地域振興局農林部農業振興普及課

## No.3

Tel 018-860-3410

Fax 018-860-3834

### 生育に応じた栽培管理の徹底を！

#### 1 気象経過と生育状況

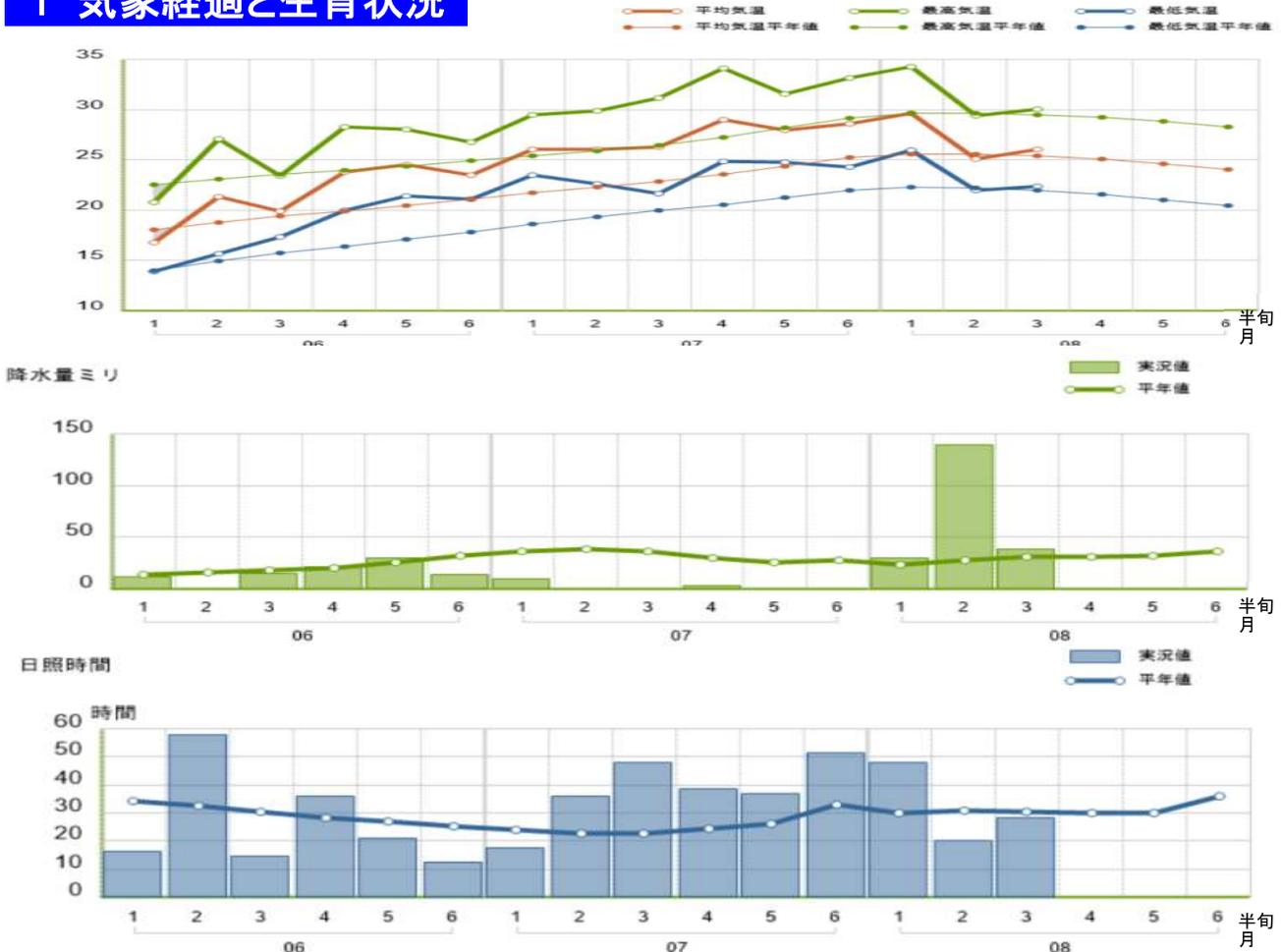


図 気象経過と平年値（令和7年6～8月）

#### 〈気象と生育の概況〉

7月以降、高温少雨が続き、日照時間は多くなりました。

7月30、31日調査では、主茎長は53.1cm(平年比129%)と長く、本葉数は12.1葉(平年差+2.1葉)と多く、分枝数は1.8本(平年比98%)やや少なくなりました。地下かんがいを行っているほ場や地下水位が高いほ場では生育は良好でしたが、7月の渇水により生育が不足しているほ場も散見されました。高温により生育が前進したため、開花盛期は7月26日(平年比-2日)となりました。

表 大豆定点調査結果 7月30、31日実施

	本年	比較	
		平年比・差	前年比・差
草丈	85.6cm	—	112%
主茎長	53.1cm	129%	108%
本葉数	12.1葉	+2.1葉	-0.6葉
分枝数	1.8本	98%	109%

※管内定点ほ場4地点の平均値

## 2 栽培管理について

### 1) 今後の気象経過

仙台管区气象台による東北地方の1ヶ月予報(8月14日発表、8/16～9/15)では、気温は高く、降水量は平年並、日照時間は多い見込みです。

気温がかなり高い見込みのため、ほ場の干ばつ対策について確認しておきましょう。

### 2) 開花後の干ばつ対策

大豆は、開花～子実肥大期にかけて水分を多く必要とし、乾燥が続くと減収することがあります。そのため、著しく排水不良なほ場を除き、開花期以降は暗きよを閉めることを検討するなど大豆の生育に好適な地下水位(40cm)の維持に努めましょう。

また、晴天が1週間以上続き、土が白く乾燥している場合や大豆の葉が立ち、ほ場の半分以上の葉で裏面が見える場合は、畝間かん水を実施してください。畝間かん水は大きなほ場(30a以上)では、ほ場を2～3区画に分け、1日に1区画ずつ2～3日に分けて実施して、畝の崩落や水口の湿害を避けましょう。全体に水が行き渡ったら、速やかに排水してください。

(水回りが悪いほ場や排水が停滞しがちなほ場では湿害の恐れがあるため、畝間かん水は実施しないでください。)

### 3) 雑草対策

土壌処理剤及び中耕・培土で抑えきれなかった雑草は、手取りまたは大豆生育期処理除草剤による除草を行います。

表 除草剤の使用時期 ※秋田県農作物病虫害・雑草防除基準より抜粋

農薬名	使用時期		使用量 (/10a)	希釈水量 (/10a)	使用回数	対象雑草
ナブ乳剤	ノビエ 3～5 葉期	～収穫30日前	150～200ml	100～150L	—	イネ科雑草 茎葉散布
ワンサイドP乳剤	ノビエ 3～5 葉期	～収穫60日前	75～100ml	70～100L		
ポルトフロアブル	ノビエ 3～8 葉期	～収穫30日前	200～300ml	100L		
大豆バサグラン液剤	だいず 2～6 葉期 (開花前) 雑草生育初期～6 葉期 (草丈45cm)	～収穫45日前	100～150ml	100L	1 回	広葉雑草 茎葉散布
アタックショット乳剤	だいず 4～6 葉期 (開花前)	～収穫45日前	30ml			

農薬名	使用時期		使用量 (/10a)	希釈水量 (/10a、倍)	使用回数	畦間処理等
大豆バサグラン液剤	だいずの生育期 雑草生育初期～6 葉期	～収穫45日前	300～500ml	100L	1 回	畦間処理
ザクサ液剤	だいず 8 葉期～ 雑草生育期	～収穫28日前		100～150L	3回以内	
ラウンドアップマックスロード		～収穫前日	200～500ml	25～50L	2回以内	
バスタ液剤	だいず 6 葉期～ 雑草生育期	～収穫28日前	300～500ml	100～150L	3回以内	畦間・株間処理
口ロックス	だいず 3 葉期～ 雑草生育期 (草丈15cm以下)	～収穫30日前	100～200g	70～150L	1 回	雑草茎葉・土壌散布
タッチダウンIQ	雑草生育期	～収穫 7 日前	500ml	2 倍	2回以内	雑草茎葉塗布

※1 大豆バサグラン液剤はイネ科雑草を除く。適用品種は「リュウホウ」とする。

※2 畦間処理剤、畦間・株間処理剤は、作物にかからないように飛散防止カバー等を使用する。

※3 ザクサ液剤、バスタ液剤の使用回数は、グルホシネート及びグルホシネートPを含む農薬の総使用回数を示す。

### 3 病害虫防除について

#### 1) 紫斑病 「発生量:多い」 ※概評は「令和7年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報第4号(8月予報)」を参照。以下、省略。

紫斑病は種子伝染し、葉、茎、莢、子実を侵します。紫斑粒を発生させる莢への感染時期は開花10～35日頃であり、この時期に降雨が続くと莢への菌糸進展が助長されます。また、収穫が遅延した時や収穫後も乾燥が不十分で長期間湿っている時には紫斑粒が増加するため、適期収穫と速やかな乾燥を行います。

表 紫斑病の薬剤散布

RACコード	農薬名	使用量又は希釈倍数（散布液量）	散布時期および回数
M1	クミガードSC	500倍	1～2回 1回目：開花期20～30日後 2回目：1回目の約10日後  ※1回防除が基本で着莢期に降雨が多い場合には2回防除
M3	ジマンダイセン水和剤	400倍	
	ペンコゼブ水和剤		
U16	トライフロアブル	1,000倍	
10・1	ニマイバー水和剤	1,000～2,000倍	
53	フセキフロアブル	4,000倍	
3	プランダム乳剤25	3,000～5,000倍	
M1	Zボルドー	500倍	
	Zボルドー粉剤DL	3 kg/10a	—

注) RACコードが1、3、10、53、U16の薬剤は耐性菌出現回避のため、各1回の使用とする。ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は使用時期に注意する。(収穫45日前まで)

#### 2) カメムシ類 「発生量:多い」

子実を吸汁加害する主なカメムシ類はホソヘリカメムシ、ブチヒゲカメムシ、アオクサカメムシです。加害期間は若莢の着きはじめから莢が黄熟する頃までにわたり、子実の被害は落莢、不稔粒、板莢や歪曲、変色粒など加害時期によって異なります。夏季が高温多照の年に発生が多くなります。8月下旬以降にカメムシ類が多くみられた場合には、マメシンクイガの防除の際に、カメムシ類にも有効であるアグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤を使用しましょう。



写真 ホソヘリカメムシ

表 カメムシ類の薬剤散布

農薬名	希釈倍数	散布液量	散布時期
トレボン粉剤DL	4 kg/10a	—	8月中旬～9月上旬 (1～2回)
エルサン乳剤	1000倍	150～300L/10a	
スミチオン乳剤			
トレボンEW			
トレボン乳剤			
アグロスリン乳剤	2,000倍		
パーマチオン水和剤	2,000～3,000倍		

※8月下旬～9月上旬の散布はマメシンクイガにも有効である。

### 3) マメシクイガ 「発生量: 平年並(前年より多い)」

マメシクイガは、本県で最も被害が多い子実害虫であり、被害粒率が30%を超えることもあります。連作により密度が高まり、水田転換畑では2～3年目以降に被害が増大します。

表 マメシクイガの薬剤散布

農薬名	希釈倍数	散布液量	散布時期
アグロスリン乳剤	2,000倍	150～300L/10a	8月下旬～9月上旬 (1回)
パーマチオン水和剤	2,000～3,000倍		
アデオオン乳剤	3,000倍		
トレボン粉剤DL	4 kg/10a	—	9月上旬(1～2回) 前年度多発ほ場では2回散布
エルサン乳剤	1,000倍	150～300L/10a	
スミチオン乳剤			
トレボンEW			
トレボン乳剤			
グレーシア乳剤	2,000～3,000倍		
プレバソンフロアブル5	4,000倍		
ヨーバルフロアブル	10,000倍		

※グレーシア乳剤、プレバソンフロアブル5、ヨーバルフロアブル以外の薬剤は、カメムシ類にも有効。

### 4) ウコンノメイガ 「発生量: 平年並(前年よりやや多い)」

発生源となる成虫は長距離移動による飛来・侵入が考えられます。食害は7月中旬以降に発生するが、7月6半旬にほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上で減収するため防除を行います。

表 ウコンノメイガの薬剤散布

農薬名	希釈倍数	散布液量	散布時期
スミチオン乳剤	1,000倍	150～300L/10a	7月下旬～8月上旬
トレボン乳剤			
カスケード乳剤	4,000倍		
プレバソンフロアブル5			

### 5) 食葉鱗翅目幼虫 「発生量: やや多い」

ハスモンヨトウは、白毛が付着した卵塊を葉裏に産み付けます。付加幼虫は葉裏に群がり表皮を残して葉肉を食害します。幼虫は齢期が進むと次第に周囲の株に分散し葉脈を残して食害します。本県では、越冬できないため長距離移動により発生します。夏～秋発生が多いです。

表 ハスモンヨトウの薬剤散布

農薬名	希釈倍数	散布液量	散布時期
トレボン粉剤DL	4 kg/10a	—	7～9月上旬
アクセルフロアブル	1,000倍	150～300L/10a	
エルサン乳剤			
トレボンEW			
トレボン乳剤			
プレオフロアブル			
アタブロン乳剤	2,000倍		
ノーモルト乳剤			
プロフレアSC			
グレースシア乳剤	2,000～3000倍		
パーマチオン水和剤			
カスケード乳剤	4,000倍		

※パーマチオン水和剤の8月下旬～9月上旬散布は、マメシクイガやカメムシ類にも有効。

## 6)フタスジヒメハムシ 「発生量:多い」

成虫は子葉及び本葉1～2枚の頃に盛んに食害し葉にはやや不整形な円孔を生じます。結実後の8月下旬～9月下旬には成虫が莢をなめるよう食害し、直下の子葉表面が黒変するので品質が低下します。アグロスリン乳剤やトレボン乳剤などでマメシクイガとの同時防除に努めます。

表 フタスジヒメハムシの薬剤散布

農薬名	希釈倍数	散布液量	散布時期
トレボン粉剤DL	4 kg/10a	—	6月上旬～下旬
トレボン乳剤	1,000倍	100～300L/10a	8～9月 (着莢期～子実肥大期)
アグロスリン乳剤	2,000倍		

**※薬剤の使用にあたっては、希釈率・使用量や使用時期など、最新の“農薬使用基準”を登録情報で必ず確認してください。**

～こまめな水分補給と休憩で熱中症対策を徹底しましょう～